



<提案のポイント>

④ 9:45～10:15

【国立教育政策研究所教育課程研究指定】

よりよい自分を求めて自ら学び、高め合う
子供の育成

～習得したことを活用して、思考力・判断力

・表現力を高める単元開発～

由利本荘市立鶴舞小学校 教諭 安齋 知子

教材文で習得した読む力を各自のテキストの読み取りに反映させることができるよう重点単元1, 2を中心に実践したところ、「できるようになったこと」を児童が自覚して学びを重ねるようになってきた。単元構想の類型や単元末に振り返る「ことばのはばたき」など単元における4つの重点と、授業の振り返り「はばたき」や逆算型の授業づくりなど授業における4つの重点によって見通しと振り返りの充実を軸に実践してきたからである。

⑤ 10:30～11:00

【次世代型教育推進センターセミナー発表】

主体的・対話的で深い学びを求めて

～小中連携を通じたアクティブ・ラーニング
の視点からの授業改善の具現化～

由利本荘市立西目中学校 教諭 田口 牧

由利本荘市立西目小学校 教諭 田口 睦子

次世代型教育センターの実践フィールド校として研究を進め、アクティブ・ラーニングの視点を生かした授業とはいかなるものなのか、小中連携した授業研究会や校内研修を通して見えてきたことを述べる。「生きる力」を具現化した資質・能力を研究の柱に据え、全職員が各教科・領域で授業改善に取り組み、児童・生徒の姿の見方を照らし合わせ、検証している。小中が連携し、子どもたちの育ちに共に責任をもち、磨き合う研修も大切にしている。

<口頭発表の録音について>

自己学習に使用する場合であっても、録音できません。自校の記録等として録音したい場合は、世話人に申し出てください。

<口頭発表の撮影について>

自己学習に使用する場合であっても、撮影できません。自校の記録等として撮影したい場合は、世話人に申し出てください。



④ 9:45～10:15

【日教弘秋田支部研究論文受賞】

**複数の専門科目の連携によるプログラミング学習の総合的な指導
～科目「情報技術基礎」と「課題研究」の
連携及び一貫指導の工夫～**

県立秋田工業高等学校 教諭 眞壁 淳

文部科学省のプログラミング教育実践ガイドには「生徒が自分でつくりたいと思える課題」などをねらいとした実践が紹介されている。専門高校においてもアプリケーションソフトウェアを作成する実践例が少ないなどの課題がある。科目「情報技術基礎」では基本的な学習を行い、科目「課題研究」では応用的な学習を行うことで一貫した指導の充実を図った。課題研究では、ゲームソフトのような動きのあるプログラムを作成できる力を育成できた。

⑤ 10:30～11:00

【秋田大学大学院研修】

**家庭科教育における探究と協働の力を育む
授業デザイン**

県立角館高等学校 教諭 小松 国子

「家庭基礎」2単位を履修する学校が増加し、知識・技術を習得させることが多くなり、活用・思考・表現の場が不足している。家庭科で目指す指導を考えると、探究や協働の力を育む授業の再構築を検討する必要がある。そこで、探究的・協働的な学びを取り入れた授業の実践状況を明らかにし、「アクティブ・ラーニング」を取り入れた探究型授業の実践を行い、Khcoderの共起ネットワークを利用して学びの過程を評価した。



<提案のポイント>

④ 9:45～10:15

【文部科学省委託

特別支援教育に関する実践研究充実事業]

キャリア教育の視点で小・中・高を貫く教育課程の編成

～学部間をつなぐ仕組みを生かした取組～

県立支援学校天王みどり学園 教諭 藤原恵理子

副題の「学部間をつなぐ仕組み」とは、隣接する学部をまたぐ研究組織であり、学部を越えて指導が積み重なる指導計画の作成を目指して検討を重ねた。この研究組織には、卒業後の生活を見据えて、外部協力者として施設事業所関係者も参加している。学部間をつなぐ仕組みを生かした取組として、指導計画の見直し、指導を積み重ねていこうとする職員の意識の高まり、キャリア教育全体計画の改訂等の成果を報告する。

⑤ 10:30～11:00

【日教弘秋田支部研究論文受賞]

知的障害特別支援学校におけるタブレット端末を活用した分かる授業（教師）、伝わる表現（児童生徒）を目指した取組

～イメージ化、焦点化、表現の補助を補うツールとして～

県立支援学校天王みどり学園 教諭 葛西 輝美

知的に障害のある児童生徒には、障害の特性ゆえ①「イメージする」こと、②「注目する」こと、③「感情や思いを伝える」ことを苦手とする場合が多い。そのため、児童生徒のもっている力だけでは、知識技能の獲得や表現には時間がかかるという実情がある。

その課題の解決のためにタブレット端末の活用が有効ではないかと考えた。論文は昨年度までの取組について述べているが、その反省を受けた今年度の取組についても発表する。



④ 9:45～10:15

【国立教育政策研究所教育課程研究指定】

自分のよさを積極的に発揮しながら、協力してよりよい生活を創っていかうとする子どもの育成
～思考力・判断力・実践力を育てる指導と評価の工夫～

仙北市立角館小学校 教諭 佐藤真理子
教諭 福田 和也

研究指定2年目は、主として「話し合い活動の充実」と「指導と評価の在り方」に取り組んできた。学級会において、短冊や思考ツールを活用した話し合いや、「くらべ合う」「どのようにするか」に重点を置いた話し合いにより、思考力・判断力が高まってきている。学級活動(2)においても、「見付ける」段階で、話し合いを効果的に取り入れたり、TTを生かした指導を行ったりしたことで、具体的な個人目標を自己決定できるようになってきている。

⑤ 10:30～11:00

※この時間の発表はありません。



第2日 2月10日(金)

E会場

<提案のポイント>

④ 9:45～10:15

【日教弘秋田支部研究論文受賞】

生徒が自信をもち、一人一人が変容する姿を求めて

～リンゴレンジャーの学習や活動への参画をとおして～

県立比内支援学校がづの分校 教諭 鈴木 陽

かづの校は、知的障害を主とする特別支援学校であるが、発達障害や非行・問題行動を抱える児童生徒が多数在籍している。障害の特性上、自己有用感や自己肯定感が低い生徒が多い。リンゴレンジャーの活動は、地域の要請を受けて生徒たち自らがせりふや演出等を考え、テーマに沿ったショーを創り上げている。地域の中で必要とされ、感謝されている経験を積み重ねることが地域貢献と理解推進、さらには生徒指導上の問題解決につながっている。

⑤ 10:30～11:00

視覚障害教育におけるイメージ形成と活用を目指した高校数学Ⅰの指導

県立視覚支援学校 教諭 深川 亮

視覚障害教育では、触覚、聴覚等の視覚以外の感覚を活用して適切にイメージを形成できるように特別な配慮が必要とされる。その理念に基づき、全盲の生徒が数学的概念に関わるイメージを形成できるように、高校数学Ⅰにおいて「操作的活動」と「言葉による整理」の学習過程を重視した授業実践に取り組んだ。その結果、教具を用いた操作・触察と数学的概念を結びつけてイメージ化や言語化が促され、基礎的な学習内容を身に付けることができた。



第2日 2月10日(金)

F会場

<提案のポイント>

④ 9:45～10:15

【拠点校・協力校英語授業改善プログラム】

生徒の主体的なコミュニケーションを目指した言語活動の充実
～英語で積極的に他と関わり合う言語活動時間の増加とその内容の工夫～

にかほ市立象潟中学校 教諭 宮野 利之
教諭 瀧澤 美里

今年度、本校英語科では「拠点校・協力校英語授業改善プログラム」の研究実践に取り組んだ。CAN-DOリストや英語力チェック表を活用し、生徒の英語力の実態把握を行うとともに、生徒同士が英語で自分の考えを伝え合う言語活動の充実と即興的に話す場面を設定した指導に努めた。また、英語で話す能力をALTとのスピーキングテストを実施することで指導と評価の改善を図った。

⑤ 10:30～11:00

【拠点校・協力校英語授業改善プログラム】

英語に親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとする子供の育成
～外国語活動における指導力向上を目指した拠点校としての取組～

にかほ市立象潟小学校 教諭 東海林 千佳子
教諭 工藤 伸子

今年度「拠点校・協力校英語授業改善プログラム」の指定を受け、教員の英語力及び指導力の向上を図り、外国語を使って自分の考えや気持ちなどを伝え合い、通じ合うことができた喜びを味わわせたいと授業改善に取り組んだ。校内研究の重点である学習のつながりや子ども同士の関わりを大切にしながら、現行の学習指導要領を踏まえた外国語活動の授業モデルを明確に確立することが、これからの教科化にもつながると考えている。本発表では、大きく変容し前進した授業実践について発表する。



第2日 2月10日(金)

G会場

<提案のポイント>

④ 9:45～10:15

【文部科学省 英語教育強化地域拠点事業】

コミュニケーション能力を高める外国語活動・英語科の指導の工夫

～学校体制で取り組む授業改善～

由利本荘市立由利小学校 教諭 秋山 由美子

由利小学校は、文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、外国語活動・英語科の研究に取り組んでいる。23分間の短時間学習の推進、All Englishによる授業づくり、子どもの思いや願いを生かした単元・教材開発や交流活動の工夫など、授業改善を進めたことで、子どもたちが英語を使ってコミュニケーションすることを楽しむ姿が見られるようになった。高学年は、教科型「英語科」の試行を進めている。

⑤ 10:30～11:00

【文部科学省 英語教育強化地域拠点事業】

他者と通じ合うよろこびを実感し、「英語でもっと伝えたい」という思いを高めていく指導

～英語教育強化地域拠点事業の取組を通して～

由利本荘市立由利中学校 教頭 田口 良徳

平成26年度に文部科学省より「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、由利小、由利高校と共に3校種連携した取組を進めてきた。小・中・高の指導の継続性を踏まえ、4技能を統合的に活用したコミュニケーション活動や校内環境の英語化、日常の学校生活での英語使用の推進、AIUとの交流等によって積極的に英語を使おうとする態度の育成を図ってきた。アンケートからは「伝えること」「伝わること」への喜びを感じる生徒が増えてきている。



④ 9:45～10:15

【日教弘秋田支部研究論文受賞】

定時制通信制高校における支援体制推進について

**～職員の専門性を活かした組織的な支援（S
SWの活用を中心に）～**

県立秋田明德館高等学校 教頭 千葉 雅 樹

本校は、県内最大の定時制通信制高校であるが、様々な困難を抱えている生徒が少なくない。そのため、特別支援教育担当の教育専門監やスクールカウンセラーに加え、今年度から新たに配置されたスクールソーシャルワーカーがそれぞれの専門性を活かしながら有機的に連携して、そのような生徒への支援を行っている。県内高校へのSSW配置は初めてのケースであり、今後の方向性を探るため、今年度の本校の支援体制の成果と課題をまとめた。

⑤ 10:30～11:00

【日教弘秋田支部研究論文受賞】

**「由工スタンダード（生活編）」の取組
～地域に愛される由工を目指して～**

県立由利工業高等学校 教諭 須田 和 仁

平成24年度から「由工スタンダード生活編」を掲げ、地域に愛される由工を目指しながら、基本的な生活習慣の確立、社会で通用する人間育成に取り組んでいる。それに近隣保育園との交流、MESAプロジェクトを加え三つの柱とし、生徒の主体性、自律心を育成している。本校は実業高校であり、卒業後即社会人となる生徒が大半である。社会で通用する人間の育成はキャリア教育及び人権教育の推進につながっている。



④ 9:45～10:15

主体的な学びを通じた確かな学力の向上
～主体的に学ぶ子どもの育成～

県立聴覚支援学校 教諭 黒澤 貴之

本校は、県内で唯一聴覚に障害のある幼児児童生徒に対して教育を行う特別支援学校である。指示を待つことが多い子どもたちに、問いを持たせ、試行錯誤させながら解決に至る探究的な学習活動の良さを取り入れた授業づくりに現在取り組んでいる。幼稚部から高等部専攻科まで幅広い実態の中、試行錯誤し、仲間と話し合う活動を取り入れ、振り返りの時間を確保することで、積極的に考えを発言したり、自ら解決策を思考したりできるようになった。

⑤ 10:30～11:00

個別の支援計画（私の応援計画）の活用に向けた取組
～本人・保護者主体の視点から～

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
教諭 高橋 基裕

本校では、個別の支援計画を活用していくためには、「本人・保護者主体」の視点が重要であると考え、名称を「私の応援計画」（以下、私の応援計画）として様式を変更した。具体的な取組としては、生徒用の様式を新たに作成して願いや思いを丁寧に聞き取ったり、私の応援計画の一部を空欄にして提示し、保護者と共に考える機会を設定したりした。現在は、これらの取組を通して作成した「私の応援計画」を地域とつながっていくツールとして活用を始めている。



第2日 2月10日(金)

J会場

<提案のポイント>

④ 9:45～10:15

【文部科学省委託

特別支援教育に関する実践研究充実事業】

ライフキャリアの視点を大切にした教育課程の編成

～地域資源を活用した授業づくりを通して～

県立横手支援学校 教諭 後 松 慎太郎

ライフキャリアの視点を「役割を果たす」「自分らしく生きる」「自己実現を果たす」と定め、キャリア教育全体計画を基盤に地域資源を活用した授業づくりを進めた。「授業改善COと行う単元構想」「学びを残すためのキャリアノート」の活用」「授業づくり振り返りシートを用いた授業評価と年間指導計画の見直し」等を積み重ねることで、ライフキャリアの視点に迫る児童生徒の変容が確認できた。また、即時的な教育課程の改善とともに、キャリア教育全体計画や教育課程編成時期の見直しに結び付けることもできた。

⑤ 10:30～11:00

【日教弘秋田支部研究論文受賞】

**寄宿舎における「安心・安全」を考えた取組
～災害時、緊急時の判断力と対応力の向上
を目指して～**

県立ゆり支援学校 寄宿舎指導員 佐 藤 礼 子

本校寄宿舎では、健康安全指導の推進を図るために日々の環境整備に努めている。演習会や通報訓練の実施と防災リーダーの育成など、職員と生徒の双方の取組から安全な寄宿舎生活を送るために「万が一に備える」ことへの体制づくりと意識の変化を検証した。

「自分の命は自分で守る」を合い言葉に、3か年にわたり取り組んできた本寄宿舎の防災教育の試みを、家庭や学校、地域にも発信し、防災意識の高揚につなげていきたいと考えている。